

セッション討議

栗田香子氏より、スクリーチ氏に、定信には西洋に対する恐怖感があったというが、一般人の場合はどうかという質問があり、スクリーチ氏から、安永、天明、宝暦年間には日本の有力者たちはオランダをコントロールできると考えていたが、18世紀末には西洋をコントロールできないものと認めざるを得ないような状況になり、恐怖感が生まれたものと思われる。一般人に関しては記録がないためわからないことが多いが、見せ物小屋で舶来品にふれる程度だったから恐怖感はなかったかもしれないとの説明があった。

マリヤ・デ・プラダ氏からの、ポンプやガラスのメタファーは具体的にはどのような文学作品の中に現れているかという質問にたいして、スクリーチ氏は、具体的に作品の中に現れるのではなく、ひとつのメタファーとして思想のなかに生きていたと考えていると述べられた。

さらにメタファーに関連して、ロバート・キャンベル氏から、発表者は真空をメタファーとして考えておられるが、『退閑雑記』を読む限り、エアポンプなどは実利につながらない玩物として弄ぶという姿勢ははっきりしている。こうしたメタファーは現代のわれわれの見解としてはとらえることはできるが、当時に文化を空気に見立てるような表現があったのかどうか、またそうしたメタファーがあったとすれば、それがどのように展開したのかをおさえる必要があるとの指摘がなされた。

張栄順氏からの中根氏に対する、「大衆文化の表象」というものは「陰翳礼讃」以外の谷崎作品にも見られるかという質問に対しては、どの作品というのではなく、初期の段階から谷崎は西洋の風俗をいち早く取り上げており、それがのちに大衆文化のなかでモダニズム現象として取り上げられるという側面があった。「陰翳礼讃」をとりあげたのは、それが1933年当時の時代状況のなかでどのように作品を書いたのかという点で歴史性をもつものと考えたからであるとの説明がなされた。

武井協三氏からはジャンルの交流という問題に関連して、米村氏に、「重ね書き」の定義に関して説明が求められた。これに対して米村氏は、昭和7年のテキストを昭和15年に脚色して映画化したのもひとつの「重ね書き」である。が、それにとどまらず、「重ね書き」という行為が、原テキストの記憶を再現させる、つまりテキストの中にある様々な要素が重ね書きされることによって強調されるということがあり、それが昭和15年の映画に顕在化していると思われる。また、文学の中では曖昧なままの人物像が映画では眼に見えるというように、ジャンルの違いによって見えてくるものがあるのではないかと返答された。

さらに、鶴崎裕雄氏の、宮沢賢治の作品が今日においては、現代人が失った自然、ファンタジーの表徴としてもはやされているという時代性を面白く感じるという感想に対して、米村氏は、教科書に載せられた宮沢賢治のテキストの読み方を指導要領のなかに見ていくと、時代によって、二宮金次郎のような聖人君子的な捉えかたからエコロジーとの関わりへと強調点に変化している。作品の受容の仕方の変化からその時代のものの見方が見える面があると述べられた。テキストに関しては、松野陽一氏から書誌学的にテキスト本文をどのように確定するかも重要な問題であるとの指摘がなされた。